

能楽師・観世流シテ方

観世喜正

Yoshinasa Kanze

一時期は「長い」「難しい」と敬遠されていた能の世界。
だがいったん入ってみれば、修練を経た能楽師や囃子方はやし かなたの人々が織りなす、
美しい伝統美の世界が広がっている。

長い時間をかけて熟成されてきた、文学、音楽、民俗、宗教、美術が溶け合う
芸能を知らないのはあまりにももったいない。

初心者でも分かりやすい能を心掛けて「のうのう能」などのイベントを主宰してきた
観世流能楽師の観世喜正氏に、能の入り方、楽しみ方を指南していただいた。

取材・文 千葉望 写真 谷山 實

忙しい現代こそ「能」に親しもう

世阿弥は世襲にこだわらなかった

——伝統芸能の世界は世襲で受け継がれるケースが多いと聞いていますが、能楽界ではそうとも限らないようですね。

観世 能楽の世界でも世襲という形は一つの大きな流れとして残っています。しかし世阿弥は「能は継ぐをもって家とする」として、別に血統にこだわっていません。能は素晴らしい芸能となったのできつと将来も続いていくだろうし、続いていつてほしいと世阿弥は考えており、その家の者が継ぐべきだとは考えていなかったのです。実際うちでも一般の家庭で育ったお弟子さんが修業をして、プロの能楽師となったケースがずいぶんあります。

とはいえ、能の家に生まれた方が入りやすいことは事実です。この世界ではいずれ子供に継がせた

いと思う親はけいこも付けますし、「子方^{こかた}」と呼ばれる子供が演じる役で舞台に立つ機会も多く、自然と小さなころから親しめる環境にあります。私もプロフイールでは一応、二歳半で初舞台ということになっておりますが、その年齢では本人はまったく分からないわけです（笑）。小さいころからやることで自然に慣れていく。そんなアドバンテージがあるため世襲のメリットも確かにあるのです。よう。しかし、子方のころは一生懸命やっていたという人でも学校が忙しいとか、クラブ活動の方が楽しくなったという理由でやめてしまうことも多いんです。

——観世さんの場合はそうありませんでした。

観世 うちの上三人が姉なんです。今、全体の二割は女性の能楽

師が占めておりますが、一応「男の業界」ということになっているものですから、私が生まれたときはもう「跡継ぎができた！」と（笑）。こうして線路に乗せられてしまいましたので、取り立てて能が好きでも嫌いでもなかったけれど、毎週日曜日に公演があり、けいこを付けてもらうのが当然という環境に慣れてしまいました。

——お忙しかったでしょうに、大学にも進まれました。

観世 うちの父は「学校なんか行かないで芸をやれ」と言われて育

った世代です。そのためか、「君たちの時代は大学ぐらい行つた方がいいよ。自分はこの世界以外になかなか友人や知り合いをつくるのができなかった。今はそういう時代ではないから、大学で見聞を広げた方がいい」と言ってくれて、私は大学に進めたのです。学生時代はあまりまじめに芸もやらず、遊んで暮らしていました。しかし能を広めていくにはどうしたらいいかという自分なりの課題を見つけられたので、それなりに必要な時間だったと思っています。

「和への回帰」が追い風になる

——最近国立能楽堂でも座席ごとに謡^{うたい}（能における声楽の部分）の字幕が出て、謡本^{うたいほん}や詞書^{ことばがき}（謡曲の詞が演目ごとに書かれた冊子）を読まなくてもある程度分かるようになっていきます。観世さんこ

自身も「のうの能」という、初心者にも楽しめる会を主宰されています。作品の成り立ちを解説していただけますし、装束も舞台上で着けて見せていただける。また参加型で謡曲の一節を先生の後



かんぜ・よしまさ●能楽師、観世流シテ方。1970年三世・観世喜之の長男として東京に生まれる。2歳半にて初舞台。「のうのう能」「喜正の会」を主宰し、能楽「神遊」同人として多くの公演を手掛ける。本拠地の東京神楽坂の矢来能楽堂を中心に、全国各地での公演に多数出演するほか、普及活動や講演も多く行う。謡曲のCD化、能公演のDVD作成など能楽教材のソフト化にも積極的に取り組み、全国にまたがる観世九^{きやうしゅうかい}卓会において、能の普及事業・謡曲指導に務める。慶應義塾大学法学部卒。社団法人観世九卓会理事。公益社団法人能楽協会理事。著書『演目別に見る能装束』（淡文社）、DVD『鉄輪（かなわ）』『大般若』『道成寺』（日本伝統文化振興財団）ほかの主演・作成・監修。

について全員で謡う試みも面白いですね。

観世 初めての方ばかりなのに、皆さん上手に謡われるので大変ありがたいですね。不思議なことに皆で謡うとうまくいくんです。『声に出して読みたい日本語』の齋藤孝先生ではありますが、日本語も外国語も声に出してみないとなかなか身に付かない。古文も同じです。声に出してみると、聴き取れないと思っていたことが聴き取れるということがよく分かります。——ただし残念なことに、会場ではまだ年配の方が目に付きます。**観世** 実は「まだ」とおっしゃっ

ていただいたのはありがたいことなんです。能は未開拓のマーケットだということですから。日本の人口を一億三〇〇〇万人とすると、たぶん一億人は能を観たことがないと思うのです。一億人の市場だと思えばいろいろなアピールの方法が考えられますね。

最近では、九〇年代とは風向きも変わってきました。そのころ若い世代は日本文化ってダサイ、格好悪い、伝統芸能なんかお年寄りが観に行くものだと考えていたと思います。着物、漢字、古典、和歌、詩、誰も全然寄り付きませんでした。寄り付くのは古くからのファ

ンだけ。ところが今世紀に入ったところから急に和のものへの回帰の傾向が見られます。「古典芸能をやっています」と言うと、「ぜひ一度行ってみたい」とおっしゃっていたことも増えてきました。

「のうのう能」の会場でアンケートを取りますと、確かに若い人

伝統継承と変化のバランスが大切

——一般向けにはインターネットでの広報も盛んになりました。**観世** おかげさまで「どこでやっているの」「誰がやっているの」というご質問はだいぶ減りました。インターネットが普及して一

番得をしたのは、われわれ伝統芸能の世界かもしれません。これまで伝統芸能は奥が深く、素人には入りづらいと言われがちでしたが、興味さえ持ってくだされば辿^{たど}り着くことも容易になっていきます。和のものへの嫌悪感もなくなり、まだまだ観ていただける余地が出てきましたね。

——若い世代もぜひ能に触れてほ

は少ないのですが、逆に言えばすべての世代が満遍なくいらっしやるとも言えます。伝統芸能なら急に若い人に入れ替わらない方が健全かもしれません。客席にいろいろな年代の方がいらっしやった方が本来のあり方に近いと思いますし、「若い人」ではなく「新しい人」が入ってくださるといいですね。

しいと思いますが、一方でこれだけグローバル化が進んでくると、演じる方のご苦労も大きくなっていくのではないかと思います。

観世 そこは実に難しいところですが、伝統を押し付けるのではなく、観てくださるお客様や習おうというお弟子さんには、知っている能はお教えしますし、舞台でも観ていただくし、そこから何事かを感じていただければいいと思っています。「のうのう能」は入門編ですので、慣れてきた方は次のステップへ進んで静かに能をご覧いただければいい。説明なんかいらな



ありがたいことです。

——普及活動をしながら、ご自分の能を高める努力もなさらずにはいけません。

観世 私も四〇代に入りました。

今まで本番の前に解説をするなど、精力的に普及活動をやってきましたが、少し落ち着いてその日の能に取り組みたいという気持ちも非常に大きくなっています。次の世代にも普及に頑張つてほしいと思っています。これからは少し自分を見詰め直して、自分の芸道精進をしていかなければなりませんし、それをまた舞台でご披露して、評価していただきたいと思っています。能の持っている本質的な魅力を自分なりによく咀嚼し、吟味し、感じていって、自分が会得したものを次の世代に伝えたい。また上の世代はまだまだ元気ですか

ら、そういう先輩たちのおっしゃることも聞きながらやっていこうと思います。

——能楽師のレパートリーの多さにはいつも感心します。観世流の伝統を継承するだけでも大変なことだと思います。

観世 演目が二〇〇ちょっとあります。もちろん全部に精通しているわけはありませんし、演じ方もいろいろ。時代に応じた演じ方もあります。特に今後は、例えば小学生に対してある程度能の本質を見せたいけれど、時間の制約があるというようなことは大いに出てくるでしょう。学校の授業は四〇分とか五〇分。一時間半の能を見せたって退屈してしまいます。そういうとき、密度を維持しながらショートカットしなければいけない。もしかすると能の再構成

成ということも必要になってくるかもしれません。いつも同じやり方でしかできないと敬遠される可能性もあるわけです。かといって

ゆつたりした時間の流れを楽しもう

——世阿弥の時代はもう少しアップテンポだったとか。

観世 昔の方が速かったという話はいくつもあります。特に戦後、伝統芸能と言われるのを嫌った人たちがいて、現代演劇としてほかの演劇と勝負しようという意思を強く持ち、突き詰めてたつぷりと演じる風潮が強くなった時代がありました。今はまた少し速くなってきましたが、実際に何分かつたかというのではなく、密度の濃さで勝負すべきだと思います。密度

千変万化しすぎると能ではなくなりますので、変わらないことの重要性と変わることの必要性のバランスはいつも気にしています。

が濃ければ長くても短くてもいいはずですから。もともと江戸時代には日が暮れてしまいうるので後半の演目は半分にしたとか、お殿様の気分が変わったから短くしたという話が續出しています。

——現代社会は忙しすぎますし、日本の場合は何事も効率的に動くことに慣れていきます。能に流れる時間とはちよつと違いますが、ゆつたりした時間を楽しむことも必要かと思っています。

観世 最近お客様のご質問で多い



のは「何時に終わりますか」ということ。東京はともかく、交通機関があまり多くない地方のお客様は九時を過ぎると不安に思われるでしょう。今までは内輪で「そんなこと分からないよ」なんて言っていたんです。能の公演は一回きりのことが多いので、リハーサルではさらっと済んだのに、本番ではびっくりするほど時間がかかることもあったりする。ですから、あくまでもアバウトではありますが、終演時間をきちんと書くこともお客様のニーズに応えることになりますね。しかし、実はしばしば私のトークが延び、終演時間を延ばしています（笑）。

——初心者は何を観ればよいでしょうか。

観世 これまで「のうの能」で選んできたものは、間違いないく初心者の方でも大丈夫です。「葵上」「船弁慶」「安達原」のように、人物関係がはっきりしたものが分かりやすいでしょう。あとは歴史上よく知られた人物が出てくるもの。源義経が登場する「屋島」などもいい。

また、能は多様な楽しみ方ができる芸能です。能面や能装束を見る楽しみ、囃子方の笛、小鼓、大鼓、太鼓などの音楽に耳を傾ける楽しみ……季節に合わせた演目の選び方などにも注目されるとよいと思います。慣れてくると、演目の中で取り上げられている物語や和歌などの文学面にも関心が及ぶでしょう。「源氏物語」「平家物語」や白楽天などの中国の詩、和泉式部などの和歌と、素晴らしい文学がふんだんに取り入れられていますから。

——関心が深まって、自分でも能を習いたいという人には？

観世 謡だけをけいこする方、仕舞（装束を着けないで舞う）のけ

いこをする方、能面を打ちたいという方、楽器を習う方とさまざまです。白足袋とお扇子があれば、洋服でもけいこを受けられるんですよ。今は各流派のホームページなどでいくらかでも情報が手に入ります。私どもの「のうの能」の事務所でも団体けいこなどのプロデュースをしております。半年に一回募集があります。試しに体験したいという方も歓迎です。昔ながらの一对一のけいこで紹介の人しか受け入れないという先生もいる一方で、最初の一年くらいは体験としてやってみて、興味を持ったら続けなさいという先生も増えていますので、ご自分に合ったやり方を見つけられるとよいでしょう。

——ビジネスの最前線で働く方にも、もつと能に親しんでいただきたいものです。

観世 私の友人も海外駐在に行ったりしますと、「能のことを教えてくれないか」と電話してきますね。外国の方との会話の中で必ず出てくるらしいのです。学校の試験じゃないから「常磐津と義太夫の違いは」（注）というようなや

専門的な質問に答える必要はありませんが、能・文楽・歌舞伎の三つは観ておいていただきたい。そうすれば大体的特徴が分かります。皆さんお忙しいとは思いますが、一度何かのきっかけをつかんでアクセスしてみると、二回目、三回目は楽に入っていきます。

ただ、どんなふうにも観ても、どんな格好で来てもよいのですが、舞台上の基本的な約束事は少し知っておかれるとよいでしょうね。たとえば能舞台が春にもなり、秋にもなり、時には海の上にも、山にもなり、お寺にもなるということ。今は映像の時代ですから舞台の設定が何も変わらないことに戸惑うかもしれませんが、自分のイメージの中で場面ごとの舞台を作り上げて劇を観てみる楽しみもあります。そうすることで、舞台との一体感がより生まれるのではないのでしょうか。

——現代人にとって、近くて遠いのが能の世界なのでしょう。敬遠せず、素直に味わってみる。これが一番大切なですね。本日はどうもありがとうございます。（聞き手／情報サービス局長・大川昌利）

（注）いずれも浄瑠璃の一種で、大阪で文楽と結び付いて発展したのが「義太夫」。一方、江戸で歌舞伎と結び付いて発展したのが「常磐津」。